

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 前田 和泉 印

学位申請者 チャラコヴァ・マリア

論 文 名 漱石とドストエフスキーにおける近代文明批判

【審査結果】

チャラコヴァ・マリア氏の博士学位請求論文「漱石とドストエフスキーにおける近代文明批判」について、論文審査と口述による最終試験（公開審査）の結果、審査委員会は、ゼイノー致で同氏に博士（文学）の学位を授与することが適当であるとの結論に達した。

なお、最終試験は、2023年7月29日14時から約2時間かけて、総合文化研究所会議室において対面で実施された。審査委員会は、前田和泉（主査）、友常勉（主任指導教員）、イリナ・ホルカ、沼野恭子（東京外国語大学名誉教授）、柴田勝二（埼玉学園大学教授、東京外国語大学名誉教授）の5名から構成された。

【論文の構成】

本論文の構成は以下の通りである。

序章

1. 論文の目的と射程
2. 漱石とドストエフスキーに関する従来の見解と今後の展望

1. 二つの近代化。ロシアと日本の西欧文明への参入

- 1.1. ロシアの文明開化
- 1.2. 日本の文明開化
- 1.3. 二つの近代化

2. 漱石とドストエフスキー

- 2.1. 『思ひ出す事など』
- 2.2. 「ドストエフスキー批判」伝説の真相
- 2.3. 「露西亜の小説」
- 2.4. ドストエフスキーと漱石がみた近代化

3. 青年の眼差しを通して。自己アイデンティティ追求の物語

- 3.1. ドストエフスキーと漱石における青春のテーマ
 - 3.1.2. 漱石とエリセーエフ
- 3.2. 『未成年』と『三四郎』
 - 3.2.1. 都会の断片
 - 3.2.2. 疎外感を乗り越える青年
 - 3.2.3. 自殺の問題 .
 - 3.2.4. 〈父の不在〉
- 3.3. 『野分』—高柳君とドストエフスキーの青年たち—

4. 成長する青年たち

- 4.1. 『白痴』と『こころ』 .
 - 4.1.1. 恋愛関係と支配欲
 - 4.1.2. 金力と権力
 - 4.1.3. ムイシキンと K—世俗に染まらなかった二人
 - 4.1.4. 未来を背負う青年たち

5. 社会に生きる苦悩

- 5.1. 『罪と罰』と『それから』 .
 - 5.1.2. 知識人が落ちる畏—プライドと神経衰弱
 - 5.1.3. 都会生活者と格差社会 .
 - 5.1.4. 戦略結婚と恋愛 .
 - 5.1.5. 現実世界へ .
- 5.2. 漱石『明暗』におけるドストエフスキー的な要素

終章

参考文献

【論文の概要】

本博士論文は、夏目漱石とドストエフスキーの文学作品を比較文学の方法論を用いて対照することによって、両者に共有されている、単なる影響関係を越えたテーマ群、世界観、そして「統一概念としての共感」を導き出そうとするものである。

そのような目的のもと、次の三点から考察が行われている。①漱石自筆資料を分析し、森田草平の証言を再検討し、漱石とドストエフスキーの関係を時系列に沿って捉えなおす。②漱石とドストエフスキーそれぞれが生きた時代の歴史的な背景・社会情勢を考慮し、そこに共通する主題・心理的構造を解明すること。③漱石のドストエフスキー受容後に書かれた『明暗』におけるドストエフスキーの影響の有無を検討する。

第一章では日本とロシアの両国ともに「周辺文明」として遅れた近代化のプロセスに入り、ともに帝国主義の道を選んだが、教育政策に相違があり、それが二人の作家の作品に影響を与えているとされる。

第二章では、漱石文学におけるドストエフスキーの直接的な影響関係を見定める。漱石が、森田草平が提供した英訳の『白痴』を読み、「誇張」であると酷評したことは知られているが、本論文では日記をはじめとした調査にもとづいて、ドストエフスキーそのものを読破したのは1915年11月から1916年3月半ばまでであるという蓋然性が提起される。

第三章では両作家にみられる青年というテーマが、『未成年』と『三四郎』を通して検討される。その際に近代化を背景とした「父の不在」「父との不和」が共通性として指摘される。また同時に、東京とペテルブルグという都市の歴史とイメージの相違が指摘される。さらに『野分』と『地下生活者の手記』、『罪と罰』を比較対照し、下層社会に生きるものたちの類似性と、漱石作品における「ドストエフスキー的な登場人物」の造形が指摘される。

第四章では、『白痴』と『こころ』の近似性が検討され、社会が経験する悲劇とそれを超えていく世代への期待、功利主義と帝国主義に支配された人物像という共通性が指摘される。ただし漱石の女性描写（「お嬢さん」）は静的であり、その点でドストエフスキーとの相違が存在している。

第五章では『罪と罰』と『それから』が検討される。近代の論理に支配された人物たちという共通性がそこにあるが、前者は「非凡人」論のための思想殺人、後者は「名誉」のイデオロギのために相手を捨てるという行為があり、それらを振り返ることで自身の過信を思い知るという過程が類似していることが論証されている。さらにそれらの過ちを通して「新生活」に踏み出す結論において、女性の役割に課されている意味が相似していると指摘される。

最終章は『明暗』の検討である。『明暗』に着手する前に漱石がドストエフスキーを読んでいたことを踏まえ、津田・お延の関係に見られるカーニバル性や、先行する作品にはみられなかった「わざわざ人の厭がるやうな事を云つたり為したりする」人物の造形など、漱石のドストエフスキー受容が見いだされる。ただし、そこに類似性が存在しても、それがかならずしも直接的な影響関係にもとづくものではないことが指摘される。

各章での検討を踏まえて、現代社会の暗部だけでなく、「人と人とを繋ぐ共感の役割」が強調されていること、さらに両作家の世界観には、スピリチュアルな土台の違いを超越した「統一概念としての共感の大切さ」があると結論される。

博論審査において、審査委員から共通して指摘されたことは、日本とロシアを代表する作家を比較文学の方法の俎上に載せるというスケールの大きな課題に挑戦しつつ、しかも文学理論を振り回すことなく、精緻で着実な読解と先行研究への目配りというオーソドックスで地道な文学研究にもとづいて、考察を学術的な仮説へと発展させていることである。

それを可能にしているのが、ブルガリア語のネイティブであるチャラコヴァ氏が、ロシア語と日本語の作家を読みこなす抜群の語学力を有していることにあり、それは称賛に値する。

比較文学の方法においては、同時に直接的な影響関係のない作品を比較するというデイヴィッド・ダムロシュの「世界文学」をおそらくは視野に入れ、比較文学・世界文学の両者を組み合わせて説得力のある立体的な考察がなされている。漱石がドストエフスキーの何をいつ読んだのか、という実証研究はスリリングな謎解きのような方法論でなされている。そのうえでロシアと日本に共通する歴史性がもたらした精神構造と、それがよく似た作品群を生み出したという論証の手並みがスムーズである。

またその考察においては、『三四郎』と『未成年』、『こころ』と『白痴』、『それから』と『罪と罰』という作品を近代化批判の観点から突き合わせて論じる試みが斬新であり、組み合わせ自体もあまり前例がない。第三章の「父の不在」という共通点の指摘も興味深い。第五章のラスコーリニコフの「思想殺人」と代助の「姦通」という、両者に共通する「罪と自己破壊」による現実批判と、それを反省的に振り返ることで、両者が「現実世界へと足を踏み入れる」という考察も新鮮である。

ただし、次のような課題も指摘されている。第四章のタイトルは「成長する青年たち」であり、「新世代へのメッセージ」を結論としているが、『白痴』と『こころ』は必ずしも成長する青年たちがテーマではなく、「新世代へのメッセージ」も強引に結びつけている感がある。『白痴』の解釈で、ムイシュキンがナスターシャに抱く「自己犠牲的な同情心」を、『こころ』の先生と私とのあいだの「同情の糸」と重ねているが、「同情」という表現は同じでも、この理解には無理がある。これらは読みの構図の拡大適用ではないだろうか。

また、両作家の小説、日記、書簡などを分析の対象とするとき、表出されている思想・考えをすべて作者自身の思想として均等にとらえているが、それではテキストの自立性が発見・評価されていないのではないか。バフチンが指摘した、ドストエフスキーの小説の特徴とされるポリフォニーにしたがえば、ドストエフスキーにおけるムイシュキン、ゾシマ、シャートフの発話をそのままドストエフスキーの思惟だにとらえる必要はない。登場人物の複数の声に作者の声もまじっているとすれば、作者の真正の声を見つけるのは判然としないはずである。それこそがポリフォニーによって構築されるテキストの自立性のはずである。

さらに、作家間の影響論についていえば、ハロルド・ブルームが主張した、「遅れてきたものが先行者に抱く不安」などの理論について配慮してもよかったかもしれない。作品が発表された時間軸に関係なく、作品を読んだ前後関係によって、理解や影響関係は変化する。それは読みの間テキスト性にかかわる論点である。

歴史理解にかかわっては、ドストエフスキーが先行するロシアの「専制権力」「農奴制」に抱いた理解と、近代日本批判とともに漱石が有していた前近代（江戸時代）批判の相違

がさらに深く検討されてもよかっただろう。第五章の『それから』と『罪と罰』の比較では、互いに「働かない」主人公の近似性が指摘され、労働の批判が近代批判の文脈を持つという指摘は斬新であるが、これも社会状況に即した叙述が必要であったのではないか。これにかかわって、ロシア・日本を「周辺文明」の位置から考察するという観点は興味深い。何を中心・周辺とするかは、さらに考察されてもいいはずである。第一章でドストエフスキーの西欧滞在経験は外見的な相違点が強調されるのに対して、漱石のそれは日本の思想的な「遅れ」を強調している。こうした体験の相違が創作に残している痕跡も重要だろう。そもそも漱石にとってロシア文学は西欧に属していたのかどうかもひとつの論点である。両者のスピリチュアリティの相違についても考察の余地が残っている。ドストエフスキーの民族主義的な救済思想は、漱石との関係では大きな相違であるが、宗教をめぐる両者の差異も大きな論点であろう。

そして最後に、そうしたスピリチュアルな土台の違いの上にチャラコヴァ氏が見出している、二人の作家に共通している「共感の大切さ」の意味である。比較文学・世界文学の方法論を駆使したうえで到達したこの結論は本博士論文の成果のひとつであるが、なおまたその内容がさらに展開されることが望ましいだろう。

以上、細部に課題は見受けられるものの、精緻な作品論研究と、比較文学としての研究の斬新さと学術論文としての完成度をふまえて、マリア・チャラコヴァ氏の博士号授与は妥当であると審査員全員は一致して認めるものである。